ぶらっと半田　　2015.11.23

湊街亀崎の「坂道・せこ道」を巡る

半田の「ふるさと散歩」は亀崎地区のみ参加することができなかった。これまで亀崎のふるさと散歩のときは、何故かいつもふるさとガイドの予定が入っていたのだ。今回は特別にガイドをお願いして案内してもらった。

「亀崎駅」と「イワシハンペン」

隣町なので車で行きたいところだが、駐車場のことを考えて電車にした。そこで思ったのだが、半田へ行く時は電車を利用したことはあるものの、亀崎駅に降りたことはないのだ。JR の駅で最も古い駅舎として知られているが、じかに見る機会を得たのだ。初めて降りた駅舎には「明治１９年１月」と記された JR の建物財産標が張り付けられている。最近取り付けられたエレベーターも、駅舎の雰囲気を壊さないようなデザインとなっており、なかなか趣のある風景になっている。

私にとって亀崎は幼いころの思い出がある、それは私のお婆ちゃんの妹が嫁いでいるところだったのだ。そのおばさんが里帰りすると必ず「イワシハンペン」を土産に持ってきてくれたことを覚えている。静岡では「黒ハンペン」と呼び、特別なハンペンのように思われているが、東浦では普通のイワシハンペンだ。そんなことから亀崎と言うとおばさんの「イワシハンペン」が今も思い出される。私にとって亀崎とはイワシハンペンが似合う漁師まちだった。

明治１９年の表記が…

エレベーターも駅舎に合わせたデザイン

東光寺にたたずむ「堅田峰吉」と４５体の弘法大師

最初に訪れたのは亀崎鉄工所の創始者「堅田峰吉」の像がある東光寺、亀崎小学校の隣りにある。お寺の裏から笹をかき分けて住むと立派な像が建っている。周りの柵は鉄パイプで、すでにボロボロに錆びている。その隣には灯篭を模した鉄製の柱があり「泥の中の蓮のごとし」と記されている。この言葉の意味はおそらく、蓮はどろの池でも美しく咲くことから、「堅田峰吉」が鉄鋼業の汗にまみれた中で、ひときわ光り輝いていたと言うことか。亀崎を代表する人だが人目につかない場所にあると忘れられていくようで、ちょっと寂しい。もう少し目立つ案内板があると良いのに……。表から入って行くと、今度は鉄製の大きな常夜灯がそびえている。これも珍しいものだ、ただ材料が鉄だと錆びてくるのが気になる。錆をとりその都度塗装をし直さないといけない。その周りには大きな桜の木が数本並んでおり、花の季節には鉄製の常夜灯と桜のミスマッチと思われる取り合わせが、東光寺の名物になっていることだろう。その鉄製の常夜灯の周りは石垣が組まれて、坂道が続いている。弘法坂と呼ばれ上りつめたところに東光寺がある。

鉄製の常夜灯

４５体の弘法さま

ここ東光寺は説教所だったが、和歌山県にあった東光寺から寺号・本尊を移して明治３６年創建した。知多四国番外霊場で「年弘法」で知られ、弘法坂を上ると弘法さまの人生に出会える場所である。お寺には弘法大師の年齢ごとの姿の木像が安置されている。

６２歳まで生きたので６２体ありましたが、昭和２０年の三河地震で弘法堂が全壊し１７体の像は破損。昭和５５年に再建したお堂には、現在４５体が安置されています。お参りをしましたが、拝殿の前に置かれたろうそくを立てたり線香を立てる台は、石ではなくこれも鉄で造られていました。

「かめてつ」と「大逆事件」

次に亀崎鉄工の跡地へ立ち寄った。明治２９年に開業した亀崎鉄工は「かめてつ」と親しみをこめて呼ばれていたと言う。明治４０年に製材機械である帯鋸、縦鋸や木くず燃焼炉で専売特許を取得し、全国の製材所へ納入された。最盛期には１３４名の職工が働いており、当時としては大工場だった。

それと亀鉄には明治４３年に起きた「大逆事件」の首謀者の一人だった宮下太吉も働いていたことがあったと言う。この事件は多くの社会主義者、無政府主義者が明治天皇暗殺を計画したとして検挙され、幸徳秋水や宮下大吉ら 24 名が死刑に処された。宮下大吉は信州の安曇野市の製材所で爆裂弾を製造して、明治４２年に爆破実験をしたとされている。亀鉄の歴史と結びつくものではないと思うが、そんな人物がいたこともあったと.....後の世で話題になっているわけだ。

潮干まつりの山車を曳き出す「尾張三社」

海岸近くまで行くと尾張三社がある。その手前角には黒い板に白壁の建物が続き、一見して酒屋か溜り屋と思える景色だ。聞くとやはり伊東合資会社という酒屋で、「敷島」と言うお酒で知られていたが、今は製造していないという。

今も存在感のある酒屋

尾張三社

そこから少し先にも「盛田金しゃち酒造」があり、ここは今も酒造りを行っています。その角向かいに神明式の鳥居が立ち、大きな松の木も並び広い境内を持つ尾張三社がある。尾張三社はスサノオノミコト=津島神社、ヤマトタケルノミコト=熱田神宮、アメノホアカリノミコト=真清田神社の三神を祭神としています。珍しいのは社の屋根が水平ではなく、左右ともに反りがある珍しい造りです。文政６年(１８２３)この地に津島神社の御葭流しの神符が漂着しました、何度沖へ流しても、また戻ってきます。この奇異を村人は喜び、ここを埋め立てて神符を祀り、尾張三社としました。潮干まつりの二日目は、ここ尾張三社から山車の曳き出しがスタートしています。

亀崎渡船場の跡

ここまでは車で移動し、尾張三社の次は亀崎海浜公園に車を止めた、するとここには何故か新美南吉の文学碑がある。南吉が１７歳の時(昭和５年)に少年少女ダイアリーに書いた童話「煙の好きな若君の話」の一節で、「亀崎の町は軒と軒がひっつきあうほど狭い所でした。甚左が馬でそこを歩いて行くと、ちょうど屋根の上を歩いているようでした。.....屋根の向こうには、まばゆい程に光っている海がありました。....」と、当時の亀崎の街の風景が描かれている。そのため半田市文化協会の創立３５周年と、新美南吉生誕百年を記念して平成２５年(2013)に建立されたという。

新美南吉の文学碑

「亀崎渡船場跡」の碑

その目と鼻の先の道路沿いに大きな常夜灯が立ち、隣には「亀崎渡船場跡」の碑がある。亀崎は古くから良港として開け、知多半島から三河へ渡る黒鍬街道の終点でもある。そのため、この地から碧南市大浜を結ぶ「亀崎の渡し」、高浜市田戸を結ぶ「田戸の渡し」、高浜市森前を結ぶ「高浜の渡し」の三つの渡し舟が、衣浦大橋が開通する昭和３

１年まで運行していた。私も小学生の頃おばさんに連れられて舟で対岸に渡り、それから電車に乗って碧南の親戚まで行った覚えがある。しかし、それがどこへ渡ったのか記憶がない。電車の駅に近いところだったと思うのだが....

碑の横はそうとう広い道だが、かなりの坂だったということで碑には「大店坂跡」とも刻まれている。

亀崎城主の菩提寺「海潮院」

次は海潮院へ行く途中に県社前を通るが、変形の交差点の隅っこに立派な石柱がある。そこには「神武天皇御上陸伝承之碑」とある、このようなものがあることは知らなかったし、それらしい話も聞いたことはなかった。まっ、建てたが勝ちと言うことかな。どちらにせよそんなに目くじらを立てるほどのことでもない、それに正直に伝承の地となっている。

県社の入口の隣に海潮院はある、ここは東浦の乾坤院の末寺で、当初は海長庵と称し北浦にあった。ここは亀崎城主稲生家の菩提寺で、１６２０頃三代城主の稲生重政がこの地に移し、初代城主稲生政勝の法名から「海潮院」と名付けた。今は知多四国５４番札所でもある。５４番札所はかって野間の龍松院にあったが、明治維新に廃寺となりその後各地を転々とし、明治３４年(1901) 海潮院に落ち着いた。この５４番札所のお参りは、東浦の１１番札所安徳寺を出て須賀川を渡った所にある、三角屋(大倉屋)の分岐に新四国の道標がある。そこには１２番へ向かう前に番外の５４番海潮院をお参りして、それから次の１２番に向かうように記されている。

境内に入ると大きな桜の木があり右手に大きくて立派な石碑がある、漢文のため読めないがところどころは判読できる。そこには刈谷城主水野忠重とか、忠重を討った加賀野井の文字がある。水野家と関係があるみたいなので、どなたかに読みあげて解説をしていただきたいと思うのだが....。

本堂の横から奥に入って行くととても立派なお手洗いがある、入口には持ち物を架ける金具も付いている。感心して更に進むと、亀崎城主でこの寺を開いた三代城主稲生重政のお墓がある。特別に大きいわけではないが、先が山形にとがった形の立派なものだ。

今も「県社」の愛称で親しまれる「神前神社」

このあと神前神社に向かうが、途中に「西村辰雄君頌徳碑」と記された大きな石碑と胸像がある。説明板もありどうやら戦時下における、魚の集荷と配給などに尽力した人のようだ。その隣に神前神社の鳥居と石段が続いている。「神前」と書いて「じんぜん」ではなく、「かみさき」とはなかなか読めない。子供のころは「県社」と呼ばれており、バス停も「県社前」だったと記憶している。地元ではいまも「県社」と呼ばれていると言うが、ここにお参りするのはおそらく孫のお参りの時以来である。

神前神社

創建は不明で江戸時代後期には神前天神と称し、明治４年に郷社に定められる。明治１８年神前神社に改称し、その年７月に県社となりました。祭神は神武天皇をお祀りしている、先ほど見た「神武天皇御上陸伝承之碑」のように、神武天皇が伊勢国から舟で天神洲(現在の洲の先)に上陸した。村人たちはそれを記念して上陸地点に祠を建て神武天皇をお祀りしたのが起源とされる。この故事にちなんだのが例祭「桟掛祭(はしかけさい)」で、これは舟から上陸するために陸に向けて桟を掛けたことによる。潮干まつりの山車は県指定有形民俗文化財、潮干まつりの山車行事は国の重要無形民俗文化財に指定されている。そして、ユネスコの文化遺産候補になっており、Ｈ２８年秋に選定される見込み。５両の山車を海浜に引き下ろす「潮干まつり」は臨時祭である。

「亀崎の月」と「亀崎城跡」

拝殿を少し下った所から上に登る小道がある、その道を上りきると８畳ほどの簡素なステージがある。先日のニュースになった「観月亭」の跡で、木々の間からは海が見える絶景が広がっている。観月亭は、大正４年に大正天皇の大嘗祭が行われた京都御所の屏風絵に、女流画家「野口小蘋(しょうひん)」の「亀崎の月」が描かれ、これにちなんだ和歌が詠まれたことを記念して建てられた。清水寺の舞台のような造りで、観月会が開かれるなど地元に親しまれていた。しかし、伊勢湾台風で倒壊し荒れ果ててしまい、人々から忘れられていた。それを、今年は大嘗祭から１００年を迎えることから住民が跡地を整備し、９月２７日の中秋の名月には５０数年ぶりに観月会が開かれ大勢の人でにぎわったという。しかし、その場所は安全対策などそれなりに手入れをしないと維持が難しいと思われる。　ちなみに亀崎の月にちなんだ歌は、歌人黒田清綱が「萬代(よろずよ)も　かわらぬかけを　亀崎の　なみにうかへて　月てりにけり」と詠んだもの。

そのステージがある場所から少し低いところは平地が広がり、道路にも隣接して公園らしい装いになっている。その隅に「亀崎城跡」と「亀崎の月の歌碑」が立っていて説明板もある。しかし、歌碑は元々ここにあったが城跡ではなく、ここから北側の富士山と呼ばれる高台にお城はあった。それが衣浦干拓工事のため山が削られてしまい、ここに移されたとある。この説明板は今回の月見の前に設置されたとか、歴史を伝えることはとても大切なことだと思う。

観月亭からの眺め

亀崎城跡の碑

亀崎城は１５４３年(天文１２)緒川の水野信元が築城した。初代城主稲生政勝は伊勢の国出身、緒川城水野忠政の船奉行で、北浦に軍船を配置していたという。１６０１年

(慶長６)に廃城になり、その後稲生氏の居宅となった。

このように開発が進むことで昔の場所とは違うところが城跡になってしまう、東浦の「村木砦跡」も同じように宅地化が進み、ついにその面影を見ることはできなくなってしまった。そのため、ここ亀崎城跡と同じで隣の八剣神社が砦跡として案内する場所になっている。

坂の名前もいろいろ.....

亀崎城跡の碑から隣の坂道を上って行く、ここからは亀崎城があったという方角の高層マンションはもちろん、海も見えてとても眺めの良い場所である。行者坂・次郎長峠の小さな案内があり街歩きをする人を迎えてくれる。次郎長峠と言うのは、乙川で「ホゲタノキュウロク」を討った次郎長が逃げ帰る時に通ったというのだ。もちろん誰も見た人はいないが、命名を考えた人はとても発想力豊かな人に違いない。

右手に行くと天命地蔵があるがパスして進み、「大坂」を下って行く。両端に民家の軒が迫る急な坂道で、民家の向こうには亀崎の湊がみえる何とも素敵な景観。どこか懐かしく郷愁を誘う、誰が言ったのか「亀崎の尾の道」と呼ばれているそうな。次郎長が通ったかもしれない、そんなことを想いながら歩くのは楽しいが、年を重ねた日々の生活を考えると喜んでばかりはいられない。何事も「楽」と「苦」は隣り合わせのものだから....。

立石の坂道「大坂」

このあと蓮如さんゆかりのお寺「浄顕寺」の前を通って駐車場に戻り、３時間余りの見学を終えて JR 亀崎駅から帰った。